

現代インド・フォーラム



Contemporary India Forum Quarterly Review

電子版

2018年 春季号 No. 37

日印関係 —更なる高みへ—

Japan and India Relations: Towards a Higher Stage

平松 賢司（駐インド日本国特命全権大使）

現代インドの宗教性とシャンカラ派の信仰

Contemporary Indian Religiosity and the Faith of Śāṅkaran Religious Tradition

澤井 義次（天理大学 宗教学科教授）

ヒンドゥー聖地における宗教対立と共生

Religious Conflict and Coexistence in Hindu Sacred Places

宮本 久義（東洋大学大学院 客員教授）



公益財団法人 日印協会

THE JAPAN-INDIA ASSOCIATION

<http://www.japan-india.com/>

- ※ 本誌掲載の論文・記事の著作権は、公益財団法人日印協会が所有します。
- ※ 無断転載は禁止します。(引用の際は、必ず出所を明記してください)
- ※ 人名・地名等の固有名詞は、原則として執筆者の意向を尊重していません。
- ※ 政党名等の日本語訳は、筆者が使用しているものをそのまま掲載しています。
- ※ 各論文は、執筆者個人の見解であり、文責は執筆者にあります。
- ※ ご意見・ご感想は、公益財団法人 日印協会宛にメールでお送り下さい。

E-mail: partner@japan-india.com

件名に「現代インド・フォーラムについて」と、明記願います。

現代インド・フォーラム 第37号 2018年 春季号

発行人 兼 編集人 平林 博

編集協力 現代インド研究センター

発行所 公益財団法人 日印協会

〒103-0025

東京都中央区日本橋茅場町 2-1-14

TEL: 03(5640)7604 FAX: 03(5640)1576

日印関係—更なる高みへ—

Japan and India Relations: Towards a Higher Stage

駐インド日本国特命全権大使
平松 賢司

はじめに

2015年11月にデリーに赴任してから2年余りが経った。この間、日印関係はめざましい発展を遂げ、「日印新時代」の名にふさわしい活気に満ちた状況にある。駐インド大使として、日印関係が全速力で前進しているとの手応えを感じながら仕事を進められることは、冥利に尽きると感じている。

中でも、昨年9月の安倍総理によるグジャラート州訪問は、最良の状態にある日印関係を象徴する歴史的な訪問となった。この訪問を通じ、これまで日印間で積み上げてきた各種の協力案件はさらに具体的な前進を見た。

近年の著しい日印関係の発展を牽引しているのは、安倍総理とモディ首相の極めて強固な信頼関係である。日印関係を強力かつ具体的に進めていく決意を共有する日印両首脳は、固い絆で結ばれている。両首脳はこれまでに、12回の首脳会談を重ねてきており、戦略面を含め、これだけ率直に意見交換ができる首脳同士の関係は、例を見ないと考える。

本稿では、安倍総理とモディ首相のリーダーシップの下で新たな時代を迎えている日印関係の成果及び展望について、筆者の見解を示したい。

I. 近年の日印戦略的パートナーシップのめざましい発展

日印の「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」は、防衛・安保・経済・人的交流等、様々な分野における具体的な成果により、飛躍的な発展を遂げている。近年の両国関係の主要な成果として、以下の5点を挙げたい。

1. 日印両国の戦略の収斂

昨年9月の安倍総理訪印の際に日印両国は、自由で開かれ繁栄するインド太平洋を実現するため、安倍総理の「自由で開かれたインド太平洋戦略」とモディ首相の「アクト・イースト政策」を連携させるべく協力していくことに合意した。両国は、法の支配、航行の自由や紛争の平和的解決といった国際社会の原則を共有し、インドは日本にとって、大きな転換点を迎えつつある世界情勢に国際社会の原則をもって対応するのに不可欠なパートナーとなった。このような両国の戦

略の収斂は、まさしく両国が特別戦略的パートナーになったことの証左であると言える。

2. 高速鉄道

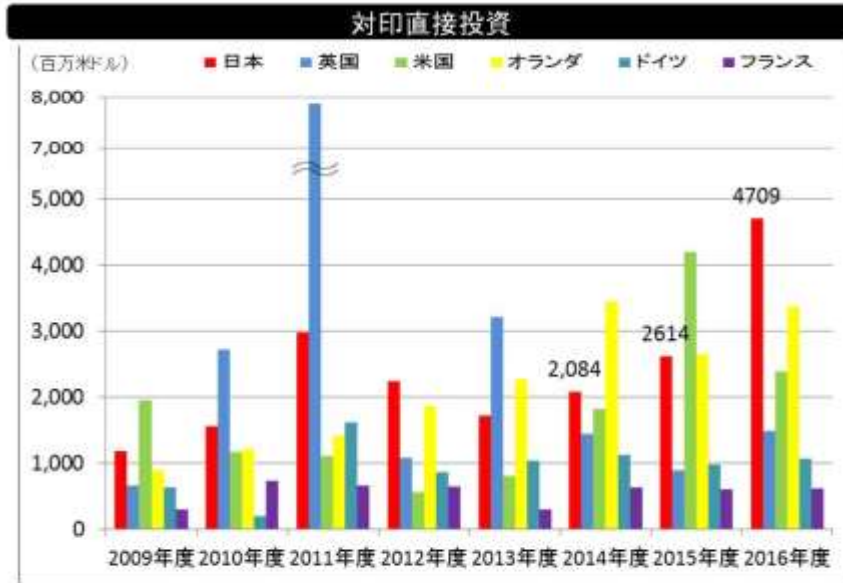
昨年の安倍総理訪印の際に、ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道（MAHSR）の歴史的第一歩が刻まれ、まもなく工事が開始される。新幹線は日本の高度経済成長の夢の起動力となったが、MAHSR は、インドで同様の高度成長の夢を実現し革新をもたらさんとしている。日本はこの大規模インフラ事業に最大限コミットしていくと共に、在来線も含めたインドの鉄道の安全性の向上に向け、50年以上無事故で運行されてきた新幹線の技術力を結集して協力していく。

3. 民生原子力協力

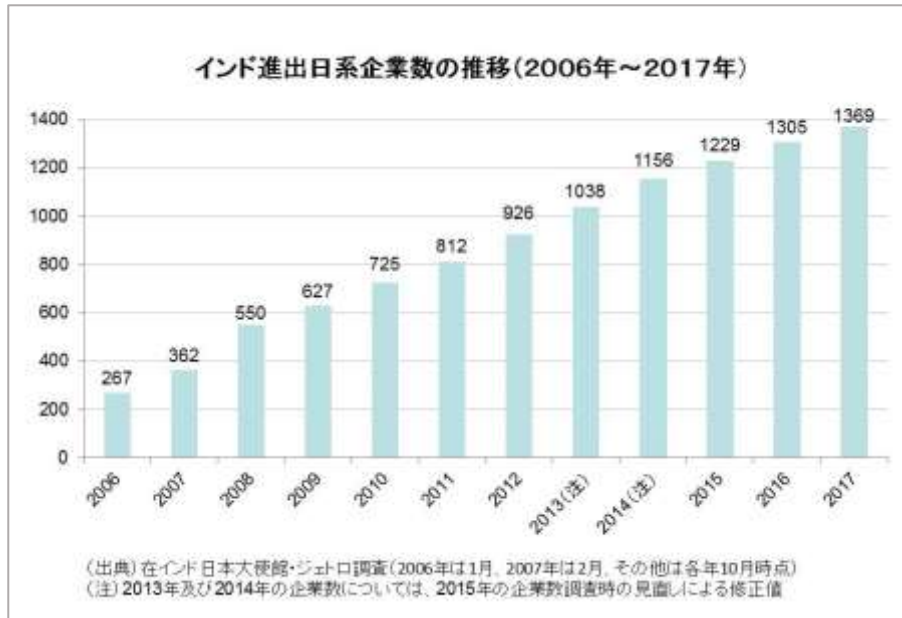
日印両国は、6年以上もの歳月にわたる交渉を経て、晴れて2016年11月のモディ首相訪日の際に日印原子力協定に署名し、2017年7月に同協定は発効した。この歴史的決定は、平和で安全な世界の実現に向けて取り組む日印の信頼関係と戦略的パートナーシップが新たな段階に高められたことを国際社会に示した。

4. 日印経済関係の飛躍的深化

日印経済関係の飛躍的深化の顕著な例として、「日印投資促進パートナーシップ」の下、日本からの対インド直接投資（FDI）が急増していることが挙げられる。このパートナーシップは2014年に表明され、5年間で対インド直接投資額及びインドに進出する日本企業数を倍増させると共に、3.5兆円の官民投融資を実現するという目標を掲げるものである。近年、日本からのFDIは、2015年の26億ドルから、2016年の47億ドルまでに跳ね上がり、インド進出日系企業数も2017年には1369社と、順調に増加している。今後も投資分野の拡大や中小企業の進出が一層期待される。



＜表 1＞各国による対インド直接投資額の推移 (出典)インド商工省



＜表 2＞インド進出日系企業数の推移

5. 人的交流

2017年は日印友好交流年であり、一年を通じて様々な記念行事を開催し、両国間の人的交流は大きなモメンタムを得た。更に、昨年の安倍総理訪印の際には、航空当局間による合意文書の交換が行われ、日印はオープンスカイを実現した。このことにより、日印間の経済交流と人的交流が一層活発化することが期待される。

Ⅱ. 日印戦略的パートナーシップの今後の展望

上述のとおり、勢いを増す日印関係において様々な具体的成果が上がってきたが、日印関係の潜在性はこれにとどまらない。インド太平洋地域は、多くの機会とポテンシャルに恵まれた地域であると共に、国際情勢の不安定化を招く様々な課題を抱える地域でもある。日本とインドは、そのようなインド太平洋地域を牽引し、ルールに基づく秩序を確保し、強化していく地域の二大プレーヤーである。安倍総理が、「最も可能性のある二国間関係」と表した両国関係を更に拡大・深化させるために、現在も様々な取組が進められている。ここでは、今後の日印関係の将来を形作っていく取組の中から、特に具体的な成果が期待される5つの分野について述べる。

1. 防衛・安全保障協力

近年、日印間の防衛・安全保障協力は、めざましく深化してきている。特に、昨年7月の日米印によるマラバール共同訓練は、三つの民主主義国家が、ルールに基づく国際秩序を保護及び強化し、自由で開かれたインド太平洋を実現するという揺るぎない決意を表明する歴史的な機会となった。筆者も米海軍原子力空母ニミッツに乗艦し、その現場を自身の目で確かめた。また、同訓練以外にも、防衛装備品及び技術分野における具体的な協力分野としての陸上無人車両（UGV）及びロボティクス分野の特定等、協力案件を着実に積み重ねてきた。

しかしながら、日印戦略的パートナーシップを更に具現化するためには、防衛・安全保障分野における協力を更に強化させる必要がある。現在、陸・海・空軍種間の交流及び協力を一層深化させるための取組が進められている他、今後は、二国間・多国間の共同訓練等の頻度を上げ、対潜戦を含む両国間の相互運用性の向上を目指していかなければならない。将来的には、日印間で海洋安全保障協力のみならず、人道支援・災害救助、平和維持活動、テロ対策等に至る拡大された共同訓練及び協力を見ることになるであろう。更に日印は、インド太平洋地域における海洋状況把握の拡大に向けた協力強化の取組も行っている。

防衛装備品及び技術分野における協力も、引き続き拡大されるべき重要な分野である。2014年に策定された「防衛装備移転三原則」により、日本は同盟国や友好国との間で安全保障・防衛協力を一層推進していくことが可能となり、インドとの間では、UGV及びロボティクス分野における将来の研究協力に向けた技術協議を開始した。また、二国間の高度の信頼関係の象徴としての最新鋭のUS-2飛行艇提供に関する日本側の姿勢をインド側が評価し、引き続き同分野における議論を行っていくこととなっている。今後とも、日印間の防衛・安全保障協力における具体的な成果に向けて取り組んでいく。

2. インド北東部を含む地域連結性

日印間では、地域連結性に関する認識も一致してきている。地域連結性の強化は「自由で開かれたインド太平洋戦略」の柱の一つであり、インド太平洋の中心に位置するインドとの協力が肝要である。

安倍総理訪印時に両首脳は、連結性インフラプロジェクトは「主権及び領土一体性、法の支配の尊重並びに環境への配慮を確保しつつ、国際的なスタンダード及び責任ある借入資金調達手法に基づき、開放され、透明性があり、非排他的な形で」実施されるべきとの点について一致し、「質の高いインフラ」の重要性を強調した。この共通認識に基づき、インド太平洋地域における具体的な連結性強化について日印間で着実に議論が重ねられてきている。

更に日印両国は、インド太平洋地域のみならず、インド国内における連結性の向上に関する協力も強化してきている。その好例として、今年の安倍総理訪印時に日印は、北東部の開発及び人的交流の促進に関する日印協力強化のため、アクト・イースト・フォーラムの設置に合意した。昨年 12 月には、同フォーラムの第 1 回会合が開催され、筆者とジャイシャンカル印外務次官（当時）が共同議長を務め、協力の可能性がある分野に関して幅広い議論を行った。道路、電気、上下水道等のインフラ整備、植林、コミュニティ・エンパワーメント等の社会開発や環境セクターへの協力といったこれまでの我が国による北東部に対する支援を基盤とし、今後は同フォーラムが、北東部という戦略的・経済的に重要な地域に対する日印協力の拡大に寄与していくと確信している。

3. 「メイク・イン・インディア」への貢献

モディ首相の掲げる「メイク・イン・インディア」への日本の貢献の歴史は長い。代表例として、マルチ・スズキの取組が挙げられ、同社は長年に亘りインドの製造業の発展に寄与してきた。先述のとおり、日本からインドへの投資は飛躍的に拡大しており、進出日系企業もその数を伸ばしている。投資分野についても、インフラ・製造業から小売り、サービス業等へと多様化している。インドは日本企業にとって最も有望な中長期的投資先となっており、今後は中小企業の進出が大いに期待される。

日本企業の投資拡大は、多くの分野で「メイク・イン・インディア」と「スキル・インディア」に大きく貢献するものである。昨年には、製造業人材育成のための日本式ものづくり学校（JIM）4 校が開校した。これにより、日本式ものづくりの技術や知識を取り入れて、製造現場のリーダーや技術者を養成し、他の様々な研修制度等も活用してインドの人材育成に貢献していく。

高速鉄道事業においても、日本は「メイク・イン・インディア」と技術移転にコミットしている。新幹線システムを採用した高速鉄道整備事業は、インドに革新的技術と社会的変革をもたらす夢のプロジェクトである。

4. 環境

モディ首相が「クリーン・インディア」構想を推進するなど、インドにとって環境問題は優先課題となっている。経済成長を遂げる国にとって、環境問題は避けて通れない課題である。インドが大気汚染等、顕在化する環境問題に対処するにあたり、重大な環境問題を克服してきた日本の経験と技術は大いに役立つだろう。このことから、在インド日本大使館は、「ブルー・スカイ協力 (Japan's Blue Sky Initiative)」を立ち上げ、インドの大気汚染低減に貢献する日本の官民の取組を推進している。今後は、火力発電所の排気ガスから有害物質を取り除く装置や、収穫後の麦わらからバイオマス燃料を抽出する技術等、日本の最先端の技術を提供し、インド内の人々の生活の質の向上と健康の増進に貢献していきたい。

5. 日本語教育

日印関係において、両国の人を結ぶ人的交流の重要性も忘れてはならず、日印友好交流年を通じて培ってきた両国民のつながりを、今後とも強化していく必要がある。この一環として、筆者はインド国内における日本語教育の振興に精力的に取り組んできた。日本語教育の振興は、単に日印間の相互理解の向上のみならず、インドの人々にとっての日系企業における雇用機会の拡大にも資する。また、日系企業にとっても、日本語学習者が増えれば、インド国内におけるビジネス機会が増進し、その活動範囲が格段に広がる。

日本語教育の普及については、昨年安倍総理訪印の際に両首脳は、より幅広く緊密な産業協力を達成するための日本語教育拡充の重要性を認識し、今後5年間で、1000人の日本語教師を育成すると共に、インドの100の高等教育機関において認証日本語講座を設立する取組を行うことを決定した。これを具体化するため、筆者はジャイシャンカル印外務次官（当時）との間で「インドにおける日本語教育分野に関する日本国政府とインド共和国政府との間の協力覚書」に署名をした。今後は、この協力覚書の下で日印の運営委員会を開催し、具体的に日本語教育普及に向けたプログラムを実施していく予定である。インド国内における日本語学習者が増えることにより、両国間の更なる経済協力及び相互理解促進につながるだろう。

おわりに

日印間で発展が期待される有望な分野は、上述の 5 分野以外にも、スタートアップ、保健・衛生、科学技術、スポーツ・学術交流等、多岐にわたる。

また、今回は紙幅の都合でほとんど触れなかったが、日印は地域及び国際社会における課題に対して緊密に連携してきており、これは二国間の文脈のみならず、米国や豪州との三カ国及び四カ国をはじめとするマルチの枠組みを通じて、自由で開かれたインド太平洋地域の実現のために協力してきている。

改めて強調したいのは、日印は民主主義、自由、法の支配へのコミットメントという共通の価値観を有するということである。また、両国の経済は、日本が最先端技術等をインドに提供すると同時に、インドはその若く有能な労働人材を日本に提供するという相互補完性を有する。更に、両国は深い歴史的及び文化的なつながりも有し、日印の人々の絆を強めている。

最後に、筆者が様々な機会にインド側に述べ、先方の支持を常に受ける信条を紹介したい。それは、この不確実性、不安定さが増す時代において、日印関係は数少ない確かなもの、頼れるものであるということである。安倍総理が述べられたとおり、強固な日印関係は地域秩序を支える国際公共財であり、日印関係に寄せられるインド国内及び国際社会の期待は非常に高い。今後とも、日印の戦略的パートナーシップを更なる高みへと導くべく、最大限尽力していく所存である。

(2018 年 4 月 2 日)

執筆者紹介 平松 賢司（ひらまつ けんじ）

京都大学法学部卒業

昭和54. 4 外務省入省

平成 7. 4 総合外交政策局総務課企画官

8. 7 アジア局南東アジア第二課長

10. 4 総合外交政策局安全保障政策課長

11. 10 大臣官房 外務大臣秘書官事務取扱

13. 4 アジア大洋州局北東アジア課長

15. 7 在アメリカ合衆国日本国大使館 公使

16. 6 在英国日本国大使館 公使

兼在ロンドン日本国総領事館 総領事

20. 7 大臣官房参事官兼中南米局、経済局

〃 大臣官房審議官兼中南米局、経済局

23. 1 大臣官房地球規模課題審議官 大使

24. 9 総合外交政策局長

26. 8 兼「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム」準備事務局長（～26.9）

27. 7 兼「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム（WAW!2015）」
準備事務局長（～27.8）

27. 11 特命全権大使 インド国駐箚

28. 2 兼ブータン王国駐箚



現代インドの宗教性とシャンカラ派の信仰

Contemporary Indian Religiosity and the Faith of Śaṅkaran Religious Tradition

天理大学 宗教学科教授

澤井 義次

はじめに

インド社会は、21世紀に入って、急速な経済発展を遂げてきた。それに伴って、インド人の海外進出も顕著になっている。グローバル経済の進展の中で、現代インド社会を生活文化の視点から捉えなおすとき、多様性を特徴とするインド社会を支えてきた重要な要因の一つが、インドの宗教性にあったことは明らかであろう。インドは「世俗国家」(secular state)を標榜しているが、今日、12億余りの総人口のうち、約80%の人々がヒンドゥー教を信仰している。ヒンドゥー教は多様な様相をもっており、その歴史的伝統も実に長い。

ヒンドゥー教は哲学思想から社会規範や生活慣習に至るまで、インドの人びとの生活全般にかかわってきた。それは数千年にわたって、多様性と多元性を特徴としたインド独自の複合的な宗教文化を形成してきたのである。したがって、宗教文化としてのヒンドゥー教は、宗教学的にみれば、いわゆる「宗教」の語によって語り尽くすことはできない。「ヒンドゥー」(Hindu)の語は、元々、ペルシア語でインダス川(サンスクリット語ではSindhu)以東に住む人びとを意味した。数千年のあいだ、インドの人びとの生活文化を支えてきたのは、社会全体を貫くこうした宗教性であった。それはインド的スピリチュアリティと言えるかもしれない。

この小論では、現代インドの宗教性の一端を明らかにするために、インド社会の人びとに伝統的に幅広く大きな影響を与えてきたシャンカラ派の宗教伝統に注目し、その具体的な信仰の様相を探究してみたい。

I. シャンカラとその宗教伝統

インド思想と言え、これまでウパニシャッドとか仏教思想、さらにウパニシャッドの解釈学として展開したヴェーダーンタ哲学などが注目されてきた。とりわけ、ヴェーダーンタ哲学と言え、インド哲学史上、最大の哲学者として注目されてきたのはシャンカラ



<写真①: シャンカラ>

(Śaṅkara 約 700–750) である。シャンカラの思想については、わが国でも、中村元や前田専學などによる世界的に有名な研究がある¹。インドには、数多くの哲学学派が存在したが、それらの中では、ヴェーダーンタ学派が最も影響力をもってきた。とりわけ、シャンカラは不二一元論 (advaita-vāda) ヴェーダーンタ哲学を説いたことで知られる。シャンカラの不二一元論とは、唯一絶対の無属性ブラフマン (梵) と個人存在の本体アートマン (我) が本来的に同一であること、すなわち「ブラフマンとアートマンの一体性」が真理であり、多様な現象世界は本来、実在しない幻妄 (マーヤー) であるというものである。さらに、この真理の知識こそが、輪廻から解脱するための直接的な手段である、とシャンカラは言う。

この学系は、中世以後、インド思想界で圧倒的な勢力を保持してきた。今日でも、パండిットと称する伝統的学者のうち、その大部分がヴェーダーンタ学徒であり、その八割以上がシャンカラ派に属していると言われて²。そのために、インドの知識人のあいだで、シャンカラの影響力は今もなお大きい。こうした経緯もあって、ヴェーダーンタ哲学といえば、特にシャンカラの名で広く知られてきたのである。



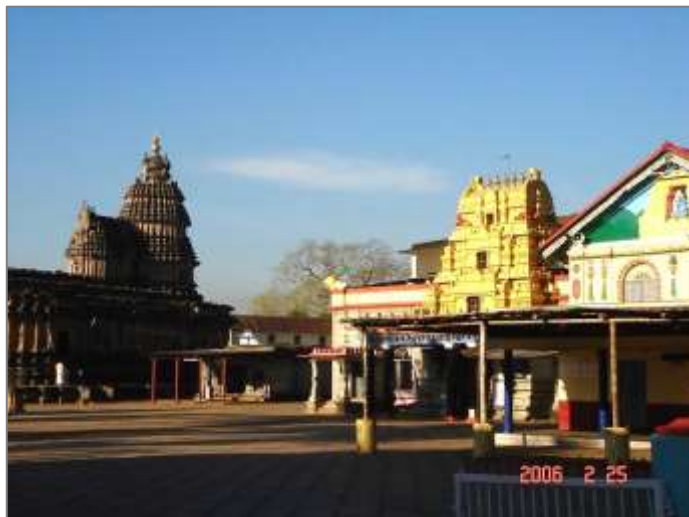
<写真②：母なる神シャーラダー神>

インド社会では、シャンカラは、いわゆるシャンカラ派の宗教伝統の開祖であったと信じられている。シャンカラ派の信仰者たちが「スムリティ」(聖伝書)に規定される行為(祭式など)を遵守してきたことから、別名「スマールタ派」とも呼ばれている。伝説によれば、シャンカラは南インドのシュリンゲーリ、東のプリー、西のドヴァーラカー、北のバダリナータに、それぞれ僧院(マタ)を建立したと言われる。これらの僧院のうち、シュリンゲーリ僧院がシャンカラ派の総本山になっている。シュリンゲーリ僧院を開創した際、シャンカラはまず、シュリー・チャクラを据えて、その上に母なる神・シャーラダー神を祀ったという。シュリー・チャクラとは、中世ヒンドゥー教以降に展開したタントリズムにおいて、

シャーラダー女神を世界の中心として全宇宙を象徴的に表現したものである。シャーラダー女神は、帰依する人びとに救いをもたらすとされ、日々、シュリンゲーリ僧院は多くの巡礼者で賑わっている。

さらにシャンカラは、帰依者たちのあいだで、人びとを救うために生まれた「シヴァ神の化身」として信じられてきた。シャンカラは宗教学的に言えば、無限に深い神性を内面に秘めた「聖者」である。シャンカラは信仰者にとって、シヴァ神と同定される。シュリンゲーリ僧院の法主は、今日まで代々、「シャンカラチャーリヤ」(シャンカラ師)とか「世師」(Jagadguru、「世界を教え導く師」の意味)と呼ばれてきた。現在の

シャンカラチャーリヤは、シャンカラ（初代のシャンカラ）から数えて、第36代目のバーラティー・ティールタが法主の座に就いている。シュリンゲーリ僧院の法主は、代々、シャンカラ派の信仰者ばかりでなく、インド全土のヒンドゥー教徒たちからも尊崇されてきた³。



<写真③：シュリンゲーリ僧院
(右側の建物が、シャーラダー神を祀るシャーラダー寺院)>

Ⅱ. シャンカラ派における「師と弟子の関係」

カルナータカ州の、人里離れた山奥のシュリンゲーリ村にあるシュリンゲーリ僧院は、シャンカラが創設した当初、世俗から離れて、自ら解脱に到達することを目指す、ごく少数の出家遊行者（サンニヤーシン）の修行の場であった。シャンカラを師と仰ぐ出家遊行者は「弟子」（シシュヤ）として、シャンカラの指導を受けながら、解脱へ向けて厳しい修行に専心していた。シャンカラのこうしたシュリンゲーリ僧院の開創は、わが国では、空海が都から遙かに離れた高野山に真言密教の根本道場を設けたことを想起させる。

ところが、シュリンゲーリ僧院は14世紀になって、在家信者たちが僧院組織の中へと組み込まれることで、よく知られた巡礼地の一つになった。在家信者たちも自分たちを世師（シャンカラチャーリヤ）の「弟子」と呼ぶようになった。このようにシャンカラ派の伝統では、出家と在家の両レベルで、「師と弟子の関係」の二重性が存在している。

シャンカラ派の宗教伝統において、シャンカラ（初代のシャンカラ）と後代のシャンカラチャーリヤは、同じ呼称「シャンカラチャーリヤ」ということもあって、しばしば混同されてきた。たとえば、シャンカラの著作とみなされる文献は、伝統的におよそ300以上にのぼるが、それらの著作には、後代のシャンカラチャーリヤの著作が

含まれていると考えられる。シャンカラ派では、伝統的にシャンカラに帰せられる文献は、いわば教義的な意義を担ってきた。それらの著作は、聖典の注解書、教義綱要書、讃詩（バクティ・ストートラ）に大別されるが、文献学的に「真作」と「偽作」に分類されている。

シャンカラは「真作」と言われる哲学文献では、この現象世界は幻妄（マーヤー）であり、無属性ブラフマンこそが唯一の实在であることを説いている。解脱のためには、その真理の「知識」（ジュニャーナ）こそが肝心であると強調している。ごく少数の出家遊行者は厳しい修行をとおして、この真理の体得をめざしている。しかし同時に、シャンカラは在家の庶民たちを救うために、神々への信愛（バクティ）を説く讃詩も著したと伝承されてきた。ただ、讃詩は文献学的に「偽作」とみなされ、これまでインド哲学研究の対象として扱われてこなかった。ところが実際、シャンカラ派の信者たちは、讃詩がシャンカラの「真作」であると信じており、讃詩をよく暗誦している。シュリンゲーリ僧院では、毎日、早朝に讃詩がスピーカーから流れ、人びとの信仰を喚起している。

Ⅲ. シャンカラ派における救いとその意味構造

シャンカラ派では、「師と弟子の関係」が出家・在家の両レベルで見られる。先に述べたように、シャンカラは不二元論哲学において、ブラフマンの知識（ジュニャーナ）のみが解脱の直接的な手段であることを強調したが、在家信者のように、出家遊行が不可能な場合、解脱への準備として、カルマンとバクティがブラフマンの知識を獲得するまで必要であることを説いた。今日、在家信者たちが実践するカルマンやバクティは、シャンカラの解脱論の視点からみれば、「心の浄化」という救済論的意義をもっている。ところが、在家の信者たちは神々への信愛（バクティ）によって、病いや苦しみからの救いを求めているが、出家遊行者と違って、解脱への到達を求めているわけではない。現在の第 36 代目シャンカラチャーリヤは、在家信者に対して神々への信愛の大切さを説くと同時に、ヴェーダ聖典に規定されるカルマン（行為）の遂行を勧めている。

ここで、現在のシャンカラチャーリヤ（世師）の逸話を手がかりとして、シャンカラ派の信仰における救いの様態に少し触れてみたい⁴。ある逸話によれば、心の病いについて、世師はシュリンゲーリ僧院の礼拝（プージャ）で与えられる「お守り」を与えた。信者がそれを受け取った後、心の病いは次第に治ったという。また、世師が信者に「プラサーダ」（儀礼のお下がり）を渡したところ、信者の病いは医者が驚くほど早くに回復したという。それはシュリンゲーリ僧院のシャーラダー神の恩寵によるものであると信じられている。このように多くの巡礼者が日々、インド各地からシャーラダー神の恩寵およびシャンカラチャーリヤへのダルシャン（会見）を求めて、シュリンゲーリ僧院を訪れている。

これらの具体的な信仰からも明らかなように、在家信者にとって、シャンカラチャーリヤは呪術宗教的な力をもつ聖者として信じられている。シュリンゲリ僧院の「お守り」や「プラサーダ」、さらに「マントラ」などをおして、人びとに救いがもたらされるという、こうした庶民的信仰の様態は、シャンカラ派の哲学文献には記されていないが、長年にわたって伝統的に継承されてきた、いわばシャンカラチャーリヤ信仰の一端を示している。こうした具体的な信仰の様態を、先に触れた弘法大師・空海への庶民的信仰、すなわち、弘法大師の力にすがって霊場を巡礼する人びとに、弘法大師・空海が救いをもたらす呪術宗教的な聖者として信じられてきた具体的な信仰と宗教学的に比較考察するとき、そこに類似した救いの意味構造を見いだすことができるであろう。

おわりに

現代インド社会では、グローバリゼーションの波の中で、インターネットなどが普及し、人びとの生活様式が大きく変化してきた。それに伴って、今日、インドの宗教文化も大きく変容している。シャンカラ派総本山のシュリンゲリ僧院も、独自の研究センターを設立してホームページを立ち上げるなど、インターネットを通じた情報発信などを積極的におこなっている。こうした目に見える変化にもかかわらず、シャンカラ派の伝統を貫くシャンカラチャーリヤ（世師）と信者のあいだの関係、すなわち「師と弟子の関係」の意味構造は変わっていない。つまり、シャンカラチャーリヤは、世俗を離れた少数の出家遊行者にとって模範的な聖者であり、在家の信者には呪術宗教的な力をもつ聖者として現世利益的な救いを与えている。こうしたシャンカラ派の具体的な信仰現象は、現代インドの生活文化を支えてきたインド的宗教性の一端を示していると言えるであろう。



<写真④：シュリンゲリ僧院の研究センター>

(2018年4月2日)

¹入手しやすい研究書としては、たとえば、次の著書がある。中村元『シャンカラの思想』岩波書店、1989年。前田専學『ヴェーダーンタの哲学』平楽寺書店、1980年。なお、シャンカラ研究の現況については、拙著『シャンカラ派の思想と信仰』慶應義塾大学出版会、2016年、序章を参照。

²前田専學『ヴェーダーンタの哲学』、37頁。

³ シャンカラ派のこうした信仰現象は、インドではよく知られているが、これまでほとんど研究されたことがなかった。こうした点について、筆者は拙著の中で、宗教学的な視座から論じている。詳しくは拙著『シャンカラ派の思想と信仰』を参照。

⁴拙論「シャンカラ派における救いの意味構造」『印度学佛教学研究』第65巻第2号、2017年、536—543頁。

執筆者紹介 澤井 義次（さわい よしつぐ）

1951年生まれ。天理大学宗教学科教授。専門は宗教学・インド学・天理教学。天理大学宗教学科を卒業後、東北大学大学院を経て、ハーバード大学大学院（宗教学）へ留学。Ph.D.（ハーバード大学）、博士（文学）（東北大学）。日本宗教学会賞や東方学会賞を受賞。

主要著作に、『シャンカラ派の思想と信仰』（慶應義塾大学出版会）、『出家遊行者とスマールタ派在家者の信仰』（英文著書、ウィーン大学出版会）、『聖者たちのインド』（共著、春秋社）など多数。



ヒンドゥー聖地における宗教対立と共生

Religious Conflict and Coexistence in Hindu Sacred Places

東洋大学大学院 客員教授

宮本 久義

はじめに

インドは多民族、多宗教、多言語の国である。このような多次元的社会では、人々の「帰属意識」も多様である。アーリヤ民族に属し、宗教はヒンドゥー教で、母語はラージャスターニー語という人もいれば、ドラヴィダ民族で、宗教はイスラーム、母語はタミル語という人もいる。インドはおおむね言語の違いによって州が区分されているが、その州分けと諸宗教徒の地域分布は重ならない。そのような状況下、人口の約 80%を占めるヒンドゥー教徒（ヒンドゥー）と約 14%のイスラーム教徒（ムスリム）のそれぞれ一部が各地で対立している。数字的に見れば、マジョリティとマイノリティという形で、もし絶対的な人口が少なければ、当然多いほうが少ないほうを制圧してしまう。しかし、インドの人口は 2011 年の国勢調査では 12 億 1057 万人であったが、現在は増加率を考慮すると 13 億前後になっていると考えられる。人口増加率は、平均するとムスリムの方が高いと言われている。そうすると、14%くらいのムスリムといっても 1 億を優に超す人々が暮らしているわけである。なおかつ、インドの隣にはパキスタンとバングラデシュという人口が多くかつムスリムが大多数を占める国があるので、彼らの存在を考慮すると、インドに住むムスリムの自分の宗教に対する帰属意識は、人口数だけでは量れないということになる。

以上のような宗教的背景のなか、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒がともに重要な礼拝の拠点を持っている北インドのバナーラス、アヨーディヤー、マトゥラーでは、警察が常駐して警備する状態が何年も続いている。

今回はそれら三つの聖地を取り上げて、両宗教徒間の対立の歴史的経緯と現在の状況について報告し、共生についての問題を考えてみたい。聖地をどうして取り上げるのかというと、日本のような檀家制度があまり見られないインドでは、聖地巡礼や祭礼、儀礼に参加することなどが、自分たちがヒンドゥー教徒であるとか、イスラーム教徒であるとかのアイデンティティをもう一度確認する機会となっている。そういう点で、聖地が非常に重要にファクターになっているわけである。

I. 宗教対立の象徴アヨーディヤー

アヨーディヤーはウッタール・プラデーシュ州の州都ラクナウの東約 150 キロに位置する古都である。ヒンドゥー教の三大神のひとりで宇宙を維持するとされるヴィシュヌ神は、世界が危機に瀕したり乱れたりすると化身（アヴァターラ）として世界に降臨し、世直しをしてきたと信じられている。その第 7 番目の化身が叙事詩『ラーマヤナ』の主人公ラーマであり、アヨーディヤーはそのラーマの生誕地として知られている。英雄ラーマの活躍するこの地はヒンドゥー教徒にとっては最も重要な聖地の一つになっている。

1528 年、ラーマの生誕地とされる場所にあったヒンドゥー寺院をムガル帝国初代皇帝バーブルが破壊して、イスラームの礼拝堂（マスジッド、のちにバーブルの礼拝堂と呼ばれるようになった）を建立した。その後土地の帰属をめぐる訴訟などいろいろな問題があったものの大きな事件はなかったが、1992 年、ヒンドゥー至上主義者がそのマスジッドを破壊したことで、大暴動が起こった。現在は連邦政府が管理しているが、今も軋轢が続いている。現在は破壊された場所全体が金網に覆われ、ヒンドゥー教巡礼者たちは、銃を持った大勢の警官に監視されながら動物園の檻のようになっている通路を進み、ラーマ神が祀られている祭壇に詣でる。途中、金網越しにイスラーム礼拝堂の残骸がそのままになっているのが見られる。ムスリムでこの場所を訪れる者はいなくなってしまうようで、とても聖地とは呼べない状態になっている。

アヨーディヤーで起こったヒンドゥーとムスリムの対立は、その歴史的経緯を含めて「アヨーディヤー問題」と呼ばれ、その後のヒンドゥー・ムスリム間の宗教的緊張は、この問題が起爆点になっていると考えられる。

II. クリシュナ神ゆかりのマトゥラー

アヨーディヤー問題は、ヒンドゥー教のほかの聖地マトゥラーやバナーラスにも飛び火した。デリーの南南東約 140 キロに位置するマトゥラーは、古来ヴィシュヌ神の第 8 番目の化身クリシュナの生誕地とされ、紀元前 8 世紀頃、すでにクリシュナ崇拝が隆盛していたともいわれる聖地である¹。クリシュナは、叙事詩『マハーバーラタ』で重要な役割りを担う神であり、ラーマ王子と並んで人気がある。

マトゥラーの略史を示すと、次のようになる。

- ・紀元前 8 世紀頃、すでにクリシュナ崇拝が隆盛していた。
- ・1～3 世紀頃、クシャーナ朝時代にケーシャオ・デーオ寺院建立。
- ・1017 年、5 代にわたるデリー・イスラーム王朝の一つガズナ朝のマトゥラー略奪。

- ・ 1500 年、同じくローディー朝のケーシャオ・デーオ寺院破壊。
- ・ 15～16 世紀、チャイタニヤ、ヴァッラバが聖地再興。
- ・ 16～17 世紀、ムガル帝国第 3 代皇帝アクバル時代の安定。
- ・ 1669 年、第 6 代皇帝アウラングゼーブにより破壊、跡地にイスラーム礼拝堂建立。
- ・ 1960 年、隣地に「クリシュナ生誕地（寺院）」建立。

これに見るように、マトゥラーは非常に古くからクリシュナ崇拝が隆盛していたが、途中、中世にローディー朝による破壊、16、17 世紀のムガル帝国は第 3 代皇帝アクバルが宗教に寛容であり（王妃も各宗教徒から娶った）その支配下での安定、しかし過激な皇帝として知られる第 6 代アウラングゼーブによる破壊など、複雑な歴史をたどっている。そして 1960 年、イスラームの礼拝堂の隣地にヒンドゥー教徒が「クリシュナ生誕地寺院」を建立した。筆者も何度か訪れていて、以前はヒンドゥー寺院側からイスラーム礼拝堂の地下に通じる通路があり、そこにあるクリシュナ神生誕のジオラマに礼拝することができたが、近年は大勢の警官がいて、写真も撮れず地下にも入れない状態になった。この緊張状態もアヨーディヤー問題の直接の影響の一つと言ってよい。

Ⅲ. バナーラス

バナーラスは正式名称がヴァーラーナシーで、英語のベナレスという呼称でも知られる沐浴で有名な所である。本稿ではここに住む住人が普通に用いるバナーラスという名称を使用する。

バラナーナスは、ヒンドゥー教の聖地のうち最も重要な聖地と考えられている。ガンジス河で沐浴をすれば、それまでの一切の罪は浄められ、さらにどんな罪を犯した人でもバラナーナスをめぐる巡礼路の内側で死ねば、輪廻転生の業から解放されると信じられている。

バナーラスの略史は次のようになる。

- ・ 紀元前 9 世紀頃、現在の市の北部に市街地の遺構。
- ・ 前 6～前 5 世紀頃、カーシー（カーシ）国の首都として、十六大国の一つに数えられる。
- ・ 5 世紀に中国僧法顕、7 世紀に玄奘が訪れ、ヒンドゥー聖地として隆盛を誇る様子を伝えている。
- ・ 12 世紀のガーハダヴァーラ朝期までには、ヴィシュヴェーシュヴァラ（世界の主宰神）寺院を中心とする聖地として、全インドに知れ渡っていた。

- ・ 1192 年、デリー・イスラーム王朝の一つゴール朝による攻撃。以後ムスリムの攻撃と略奪の波が押し寄せる。
- ・ 14～15 世紀、同トゥグルク朝、シャルキー朝およびローディー朝による破壊。
- ・ 16 世紀、ムガル帝国第 3 代皇帝アクバルの時代は、ヒンドゥー教にも寛容な政策。寺院再建がなされた。その頃はカビールやトゥルスィーダースをはじめ多くの宗教詩人や思想家がヒンドゥー教の教えを見直し、民衆に広めた時代でもあった。
- ・ 17～18 世紀、第 5 代皇帝シャー・ジャハーン、第 6 代皇帝アウラングゼーブにより壊滅的な破壊。
- ・ 1738 年にはムガル帝国の皇帝から徴税権を得て、ヒンドゥー教徒を王とする藩王国が成立するが、1794 年以降はイギリス東インド会社の支配下に入った。
- ・ この時期にはインド各地の王侯がガンジスの岸辺にこぞって別邸を建て、今日見られるような景観が出来上がった。
- ・ バナーラスは 3000 年の歴史を誇るとはいえ、ヒンドゥー教寺院や沐浴場の石段のほとんどは 18 世紀以降に再建・整備されたもの。

上に記したように、この聖地は中世にアヨーデヤーやマトゥラーと同じように、ムガル帝国などムスリム勢力によって多大な被害を受けていることがわかる。バナーラスはヒンドゥー教三大神の一人で、退廃した宇宙を破壊し、宇宙創造の神であるブラフマー神に引き継ぐ「破壊の神」シヴァ神の聖地として知られる。その信仰の中心であるヴィシュヴァナート寺院は 12 世紀以降、何度も破壊された。特に 1669 年にはアウラングゼーブ皇帝の命により、当時のバナーラスの支配者がヴィシュヴァナート寺院を破壊し、そのレンガを利用してイスラームの礼拝堂を建立した。その一部には破壊しきれなかったヴィシュヴァナート寺院のレンガの壁が残っている。現在通称ゴールデ



<写真：カーシ・ヴィシュヴァナート寺院。奥にギャンヴァービー礼拝堂。(門前町で売られているポストカード)>

ン・テンプルと呼ばれるヴィシュヴァナート寺院は、イスラーム礼拝堂の南側に 1777 年に復興されたものである。イギリス東インド会社の支配下に入ってから 19 世紀以降の方が、いろいろなぶつかり合いはあったもののしばらくヒンドゥー・ムスリムの表立った衝突がないのは皮肉ともいえる。ヴィシュヴァナート寺院周辺は筆者の留学した 1970 年代後半の時期にも多くの警官によっての境内出

入口のチェックがなされていたが、アヨーディヤー事件以後はさらに嚴重に警備されている。

IV. 古代の理想の王国ラーマ・ラージャと マハートマー・ガーンディー

以上の歴史的経緯をみると、両教徒間の対立はイギリス植民地時代には表面的には「凍結」されていたことがわかる。両者の対立が顕在化するのにはインド独立に向けての政治運動の渦中で、宗教的教義がナショナリズム運動と結び付けられたことがその最大の理由であろう。ここでヒンドゥー教の側のナショナリズム運動の醸成の基礎となった「ラーマ・ラージャ」について考えてみたい。毎年秋になると北インド各地で「ラーム・リーラー」（ラーマの遊戯）という祭礼が祝われる。ラーマという神様がヴィシュヌ神の化身として人間の姿に生まれ、その後、結婚、放浪を経て、最後にまた国に帰って王位を継承するという、ラーマの一生を劇仕立てで見せるものである。つまり、古代の理想的統治形態の王国はラーマ・ラージャ（ラーマの王国・統治）であったと捉え、ラーマの王国を擬似的に再現するような形になっている。この祭礼はヒンドゥー教徒にとっては自分たちの神を祝う当たり前の宗教行事であるが、場合によっては近隣のムスリムに対して、非常に威圧的な、ここがヒンドゥーの土地であるということを見せるような形でも行われてきたわけである²。

インド独立運動にその生涯を捧げたマハートマー・ガーンディー（1869～1948年）も、それと通底する考えを持っていた。ガーンディーはヴィシュヌ派の家に生まれ、幼少時からラーマ神を崇拝していたことが『自叙伝』からうかがえる。また、13歳の頃に、ラーマ神の信徒である学僧から『ラーム・チャリット・マーナス』（ラーマ王子の行状の海）の朗読とその詩句に関する説法を聴いて感銘を受け、「今日、私はトゥルスィーダースの『ラーマーヤン』を絶対帰依の最高の書と信じています」とも語っている³。しかし彼はヒンドゥー教の理想国家を実現しようとする道はたどらなかった。彼は真理こそが神であると考え、理性に訴えず道徳と矛盾するような宗教的教義を否定した。また、どの宗教も幾分かの誤りを持っているが、すべて貴いものとして、万宗帰一の立場をとった。それゆえ、イスラームに対しても、他の宗教と同じく平和の宗教であり、戦闘的であるとしたらこの宗教が生まれた社会環境のためという、極めて寛容な考えを示した。彼の宗教観は次の文によく表れている。「世界のどのようなところでも、一国家の意味は一宗教ということではありませんでしたし、インドでもそうでした。」（『ヒンド・スワラージ』⁴）

以上のことを考えると、ガーンディーは政治のなかに宗教を持ち込んだが、その宗教は決してヒンドゥー教徒のみに通ずる教義を持つものではなかったといえ

る。それどころか、1921年1月に北部インド・アワド地方で起こった大規模な農民運動の際には、ラーマ・ラージャ的な統治を求めてイギリス植民地政府と対立していた指導者や農民に向けて、その活動を抑制するよう「指令」さえ出している⁵。

V. インド・ナショナリズム

植民地インド（英領インド、British Raj）は、1947年にインドとパキスタンという二つの国として分離独立した。ガンディーが望んでいた一つの国という夢は叶わなかった。そして独立時に抱えた問題にいまでも直面している。その最大のものがインド・ナショナリズム運動とその影響である。1913年に創設された政治団体ヒन्दゥー・マハーサバーの指導者 D.V.サーヴァルカルは、ヒन्दゥー教に基づいてインドを統一しようとするヒन्दウトヴァ（Hindutva、ヒन्दゥー性、ヒन्दゥー魂）という概念を掲げ、パキスタン分離独立に激しく反対した。そのメンバーであった K.V.ヘードゲーワールは 1925年に排他的な民族主義を掲げる民族奉仕団（RSS、民族義勇団といわれることもある）を設立した。ガンディーを暗殺した青年は、この団体のメンバーであった。さらに 1964年には、同様の団体ヴィシュヴァ・ヒन्दゥー・パリシャッド（世界ヒन्दゥー協会）も発足する。これらの団体の支援のもとに、すでに 1951年に創設されたインド大衆連盟（バーラティーヤ・ジャン・サング）がインド人民党（バーラティーヤ・ジャンター・パーティー BJP）として再結成され、1980年代以降急速に勢力を伸長した。初代インド首相ジャワールハルラール・ネルー以後、その娘インディラー・ガンディーや、またその息子ラージーヴ・ガンディーが率いてきた国民会議派（インディアン・ナショナル・コングレス）が、中央集権的政治や汚職疑惑で支持を失うと、90年代半ばにはインド人民党が下院第一党となって連立政権を樹立した。しかし、北インド・アヨーディヤーでのイスラーム礼拝堂破壊は、パキスタンのみならずインドの人々のあいだにも、ヒन्दゥー至上主義に対する危機感を募らせた。

このようなヒन्दゥー教至上主義者の運動を牽制しようと、イスラームの原理主義をもとにしたテロ分子も活動するようになった。インド政府は、彼らはパキスタンからの越境テロリストと非難する。これにはもちろんパキスタン側は否定するが、そのようなテロリストたちが、インドの支配するジャンムー・カシュミール州を中心に各地でいろいろなテロリズムの行動を起こしているのは事実である。

対立解消の兆しが見えない状況下、2006年3月、バナーラスで同時多発テロが起こり、多数の命が奪われた。ヒन्दゥー教徒の一部は抗議の座り込みをしたが、テロの現場の一つとなった寺院の管長が中止させた。その理由は、対立を煽

り続けていては、憎悪が限りなく続くだけだ、というものであった。2008年11月にはムンバイで、パキスタンから陸路及び海路で侵入したイスラーム過激派によると見られる10件の同時多発テロが起き、170人以上の死者を出した。中世以来の負の連鎖を終息させるのには、まだ長い時間が必要なのかもしれない。

おわりに

最近インドではガンディー主義の見直しが始められているが、これを機会にガンディーの思想を再精査し、インド・ナショナリズムがヒンドゥー・ナショナリズムに陥りやすいという負の側面を真剣に考える必要があるだろう。同じ信仰を持つ者同士が幸せな生活を送る場を作ることは当然の権利である。しかしさまざまな帰属意識を持つ人々が暮らす現代社会では、それが「閉鎖系の共生」社会を作っているという認識を持つことも重要である。

多宗教が共存するインドは、独立以来、「政教分離」（世俗主義 **Secularism** とも称する）を国是としてきた。最近の世界的なイスラーム過激派の動き、インド人民党の支持基盤となっているヒンドゥー教徒たちの一部のヒンドゥー至上主義が、現代のインド社会を不安定にする一要因となっている。異なる信仰を持つ者のあいだの「開放系の共生」にするには、持続的な対話が必要であり、特に宗教間の共生を考えるとときには、政治問題をからめてはならないということを強調しておきたい。

(2018年4月2日)

-
- ¹ 橋本泰元 1991 「マトゥラーとヴリンダーバン」『都市の顔・インドの旅』（坂田貞二他編）春秋社、303-307頁。
 - ² 宮本久義 2016 「伝説のラーマ王国—ヒンドゥー教聖地の成功と重荷」『宗教の壁を乗り越える—多文化共生社会への思想的基盤』（宮本久義・堀内俊郎編）ノンブル社。
 - ³ M. K. ガンディー 2000 『ガンディー自叙伝 — 真理へと近づくさまざまな実験』Vol. 1. , 74-75頁。『ラーマヤン』は『ラーマヤナ』のヒンディー語読み。
 - ⁴ M. K. ガンディー 2001 『真の独立への道』61-62頁。
 - ⁵ この農民運動の顛末とガンディーがとった微妙にイギリス政府よりの政治的態度については、ギャーネンドラ・パーンデー 1998: 101-198頁の論文が詳しく分析している。また、Lutgendorf 1984: 374-384頁もこの農民運動とラーマ・ラージ（ラーマ・ラージャヤのヒンディー語）との関係を論じている。

[参考文献]

- ギヤーネンドラ・パーンデー 1998 「インド・ナショナリズムと農民反乱ーアワド農民運動、一九一九ー一九二二年」『サバルタンの歴史』（R.グハ、G.パーンデー、P.チャタジー、G.スピヴァック著、竹中千春訳）岩波書店
- 中島岳志 2008 「マハトマ・ガンディーーー 現代への挑戦」『NHK 知るを楽しむ 私のこだわり人物伝』（日本放送協会・日本放送出版協会編）
- M.K.ガーンディー（田中敏雄訳注） 2000 『ガーンディー自叙伝ー 真理へと近づくさまざまな実験』（1・2）平凡社
- M.K.ガーンディー（田中敏雄訳） 2001 『真の独立への道』岩波文庫
- 橋本泰元・宮本久義・山下博司 2005 『ヒンドゥー教の事典』東京堂出版
- 宮本久義 2008 「叙事詩の世界を生きる神劇ーバナーラスのラーム・リーラー」『神話と芸能のインド』（鈴木正崇編）山川出版社
- 宮本久義 2003 『ヒンドゥー聖地 思索の旅』春秋社
- Lutgendorf, Philip. 1994 *The Life of a Text : Performing the Ramcaritmanas of Tulsidas* . Delhi: Oxford University Press.

執筆者紹介 宮本 久義（みやもと ひさよし）

早稲田大学大学院文学研究科修士課程を経て、1978年より7年間バナーラス・ヒンドゥー大学大学院哲学研究科博士課程に留学。Ph.D.（哲学博士）。専門はインド思想、ヒンドゥー宗教思想。現在は東洋大学大学院客員教授。主な著書に『ヒンドゥー聖地 思索の旅』（山川出版社、2003年）、『ヒンドゥー教の事典』（共著、東京堂出版、2005年）、『インド・道の文化誌』（共編、春秋社、1995年）など。

